

演題番号:49

演題名:犬行動治療症例の分析 I 人に対する攻撃の程度と犬の背景

発表者氏名:○森元絢香 内田佳子

発表者所属:酪農大伴侶動物医療

1. はじめに:飼い主あるいは他人に対する攻撃は、行動治療科に来院する問題行動の中で多くをしめており、深刻な問題であることが多い。今回、攻撃の実態と攻撃の程度を悪化させる要因を探るために、犬の背景と負わせた怪我の程度を比較検討したので概要を報告する。
2. 材料および方法:1997年から現在までの約10年間に酪農学園大学附属動物病院行動治療科を受診した犬のうち、人に対する攻撃行動を示した犬の質問表を精査し、十分な情報が得られた374例とその背景記述を用いて、統計処理を行った(X²検定・Kruskal Wallis 検定・T 検定)。
3. 結果:飼い主だけへの攻撃が300、飼い主・他人の両者への攻撃が60、他人だけへの攻撃が14であった。負わせた怪我の程度により、出血なし群134、出血あり群139、病院での加療を要した(以下病院咬み)群101の3群に分類された。飼い主への攻撃行動を主訴として来院していたのは、出血なし群24.1%、出血あり群75.4%、病院咬み群91.0%であった。3群間の比較では来院時年齢(P=0.002)、体重(P<0.001)、性と不妊手術既非(P=0.002)、飼い主と2メートル以内の距離にいる時間(P=0.034)、飼い主が初めて問題行動を認識した時から受診するまでの期間(P<0.001)、攻撃誘因としての恐怖(P<0.001)と所有欲の関与(P=0.001)、攻撃を誘発する刺激の個数(唸る・歯をむく・咬む:各P<0.001)、咬んだ回数(P<0.001)の11項目に群間差が認められた。
4. 考察とまとめ:攻撃を示す犬の約3割が病院での加療を要するような深刻な攻撃であった。深刻な攻撃は体重が重く、飼い主との愛着が少ない、複数の刺激に反応する犬であったことから、犬を飼う際には犬種の選択、犬との関わり方、社会化を考慮する必要があると思われた。病院での加療を要した犬は、初めて攻撃が起こってから受診までに長い期間を経ていることから、軽度の攻撃であっても将来加療の必要な深刻な攻撃に発展する可能性があると考えられた。放置による攻撃の激化を防ぐために早めの対処が必要であり、行動治療に対する啓発の重要性が示唆された。

演題番号:50

演題名:犬行動治療症例の分析 II 犬の恐怖が関連した飼い主に対する攻撃行動の実態

発表者氏名:○橋本佳奈 内田佳子

発表者所属:酪農大伴侶動物医療

1. はじめに:犬の飼い主に対する攻撃行動は恐怖・所有欲・優位性等に分類されている。恐怖が関連した攻撃行動は、自分に向けられた脅威から逃れられない窮迫状況に陥った時に感じる、恐怖・不安の極端な状態から起こる。優位性攻撃行動が重視されてきた経緯から、恐怖攻撃は実際より軽視されがちである。その実態についての概要を報告する。
2. 材料および方法:1997年から現在までの約10年間に、酪農学園大学附属動物病院行動治療科を受診した犬の質問票を精査し十分な情報が得られた犬463例を用いて、統計処理を行った(X²検定・Mann-Whitney 検定・T 検定)。
3. 結果:飼い主に対する攻撃を起こした犬が360、そのうち恐怖攻撃を起こした犬が327(90.8%)、攻撃行動がない犬が83であった。恐怖攻撃を起こす犬と攻撃行動がない犬との比較では15歳未満の子供(t=2.24, df=148.4, P=0.017)がいる家庭、ケージの有無(P=0.036)等に有意差が見られた。恐怖攻撃を起こす犬種では柴犬が最も多かった(来院した柴犬の98.2%)。恐怖刺激(恐怖攻撃を起こす原因となる刺激)のなかで、恐怖攻撃の頻度増加との間に有意差が認められたものは、体罰(P<0.005)、罵倒(P<0.005)、脅かす(P<0.035)、手の接近・接触(P<0.012)、抱く(P<0.001)であった。
4. 考察:攻撃の中で恐怖攻撃が占める割合は高く、軽視できないため、攻撃が主訴の犬に対し恐怖が要因になっているか否かの診断は、非常に重要だといえる。恐怖攻撃の素因として犬種特性や犬の性格などがあげられた。併せて飼い主の体罰や罵倒等の対応・通常の接し方によって攻撃が激化することが示されたため、丁寧な問診が必要であると考えられた。恐怖が関連した攻撃行動と診断した場合、恐怖刺激を取り除くよう飼い主への意識改革を行うべく、広く啓蒙していかねばならないと強く感じた。